

主観から未来へ

金沢大学人間社会学域学校教育類附属高等学校 2年 橘 葵衣

私は今、十一月にブラジルで開かれる COP30 に参加する予定だ。高校生である私が国連の気候変動会議に出席できるのは、国連大学のプログラムを通じて環境問題に向き合ってきたからだ。最初は「自分にできることなんて小さい」と思っていたが、能登半島地震での被災体験や、インドネシアでの交流を経て、「小さな主観の積み重ねが世界を変える」という確信を持つようになった。

能登地震の後、私は水の研究に没頭した。珪藻土を使ったろ過実験で、水の色や成分が少しずつ変わっていく様子を顕微鏡で確かめる作業は地味だが、そこには確かな手応えがある。災害時に役立つだけでなく、世界中で安全な水を必要とする人々にもつながるかもしれない。その研究成果を地域の人に話したとき、「能登での経験が、世界の水問題とつながっている」と気づいた。

ただ、科学だけでは届かないものがあることも知った。インドネシアの孤児院を訪れたとき、私は最初「与える側」だと思い込んでいた。しかし、子どもたちと折り紙を折り、日本の唐揚げを分け合って食べたときに気づいた。私が一方的に「与える」より、同じものを囲んで笑い合う時間のほうが、よほど心をつなげていたのだ。特に、子どもたちと机を囲んで一緒に食べたおにぎりの味は忘れられない。硬く乾いた米粒だったが、みんなで笑いながら食べると不思議と温かかった。幸せは与えるものではなく、共に分け合うものだ、あのおにぎりが私に教えてくれた。

その一方で、同じインドネシアでも別の地域では「宗教上の理由でこれは口にできない」と言われ、驚いたことがある。私にとってはただの食べ物でも、相手にとっては信仰と結びついた意味を持っている。さらに話を聞けば、同じ国の中でも地域や家庭によって考え方は異なることも分かった。国が変わればなおさら、宗教や歴史、文化、生活習慣といった背景が違い、それぞれの主観を形づくっている。誰かにとっての当たり前が、別の誰かにとっては大切な信念やタブーになる。その多様性に触れたとき、私は「主観こそが課題を考える出発点なのだ」と実感した。

国連大学のプログラムでは、各国の高校生が集まり、環境問題について議論した。水不足を「農業の効率化」と語る人もいれば、「文化の継承」と結びつける人もいた。客観的なデータや SDGs の指標は同じでも、主観の違いによって導き出される答えは大きく異なる。私はそこにこそ未来を切り開く力があると思った。

地域の NPO でも、私は「学びの個別最適化 AI」を推進する活動に関わった。発達特性のある子どもや、家庭の事情で学びに遅れがちな子が、自分のペースで学べるように AI を活用する取り組みだ。誰一人取り残さない教育を探る中で、子どもが自分の“主観”を大切にしながら学べる環境をつくるのが、未来の社会に直結すると実感した。また子ども食堂で、地域の大人と子どもたちが一緒に食卓を囲む場面にも同じ力を感じた。そこには数字で表

せない「安心」や「居場所」があった。

世界の幸せを考えると、客観的なデータや国際的な目標はもちろん大切だ。しかしそれだけでは人の心は動かない。大切なのは、自分の体験や感情をいう主観を差し出し合うことだ。主観があるからこそ共感が生まれ、共感があるからこそ行動が広がる。能登の地震で感じた不安、インドネシアで一緒に食べたおにぎり、宗教的背景から見えた違い、研究で見えたわずかな水の透明度の変化、そして地域での子どもたちとの学び。これらはすべて私の主観だが、それを語り合うことで他者と未来を結びつけることができる。

COP30では、世界各国の若者と共に議論する。私はそこで「科学的な客観性」と「自分自身の主観」を重ね合わせ、世界の幸せをどう編んでいけるかを考えたい。